

ならやま はは かた
 ニこが檜山へ母を語る

おづやすじろう
 小津安二郎

はは めいじはちねんうま さんなんにじよ
 母は明治八年生れ。三男二女をもうけて、僕はその二男に当る。

ほか きょうだい
 他の兄妹は、それぞれ嫁をもらい、嫁にゆき、残った母と僕との
 せいかつ はじ にじゅうねんいじょう
 生活が始まってもう二十年以上になる。

ひとりもの ぼく とちう じ「こち
 一人者の僕の処が居心地がいいのか、まだまだ僕から目が放せ
 ないのか、それは分らないが、とにかく、のんきに二人で暮してい
 る。

はは あさはや よるはや ぼく ほんたい いえ めった
 母は、朝早く夜早く、僕はその反対だから家にいても滅多にめし
 も一緒に食わない。

きよねんころ げんき ひとり しょくじ したく あまど
 去年頃までは、なかなかの元気で、一人で食事の支度から兩戸の
 あ ぼく ふとん あ
 開けたて、僕の蒲団の上げおろしまでやってくれたが、今年から、
 いささか、へばって家政婦さんに来てもらっている。無理もない。八
 じゅうし じんげん つか つか おも
 十四である。人間も使えば使えるものだと、つくづく思う。それに
 しごまら「い むぐも「つ いねん はや
 しても、五十五や六十の定年は早すぎる。
 います いえ きたかまくら たか で さか
 今住んでいる家は、北鎌倉の高みにあり、出かけるのも坂がある
 はは めった いえ で
 ので、母は滅多に家から出ない。ニこがもう檜山だと思っているら
 しい。

わか はは おおおんな ぶるい いま とし わり おおばば ほう
 若いころの母は大女の部類で、今でも年の割には大婆の方であ

る。負^おつてはみないが重^{おも}そうである。

たらちねの母^{はは}を背^せ負^おいてそのあまり

重^{おも}きに泣^なきて檜^{ならやま}山^{やま}にゆ^く

「^なら^やま^やま^が檜^{なら}山^{やま}なら、い^いじ^まで^いて^もら^うつ^ても^いい。負^おつ^て行^いく^世話^せが
なくて、僕^{ぼく}も助^{たす}かる。」

※このテキストは青空文庫から抜粋し、ルビを振り、読みやすいようにしました。

【コラム】

タイトルにある檜山とは姥捨て山のことであり、高齢の親を捨てる場所（最期を迎えてもらう場）を意味する。深沢七郎が姥捨て山伝説を題材に、昭和三十一年（一九五六）に発表した短編小説『檜山節考』からきている。『檜山節考』は昭和三十三年に木下恵介監督が、昭和五十八年に今村昌平監督が映画化している。著者の小津安二郎は明治三六年（一九〇三）、東京生まれの映画監督。戦前戦後を通じて、家族や結婚をテーマに大衆性と芸術性を備えた作品を数多く撮った巨匠。独創的な映画の文体は世界的に高く評価されている。昭和三八年（一九六三）没。代表作に「生れてはみたけれど」「晩春」「麦秋」「東京物語」などがある。

この作品は「週刊朝日」昭和三十三年（一九五八）八月十日号に初掲載され、『小津安二郎映画読本』（松竹株式会社映像版權室／編・フィルムアート社販売）に収録されています。

また、当館では視聴覚資料（DVD）として小津安二郎監督作品、今村昌平監督『檜山節考』も所蔵しています。

（参考・『小津安二郎映画読本』フィルムアート社、『大辞林（第三版）』三省堂（他）

岡崎市歌

作詞 北原白秋 作曲 山田耕筰

くも
雲にかがやく竜城の

あおば あらしあお み

青葉の嵐仰ぎ見よ

くに きず せんけつ

国に築きし先傑の

いさお たか ちから

勲は高しこの力

ふる われらのちなが

奮えよ我等後永く

けんじつ ちほひ つ

堅実の地歩日に継がん

おかざき わ ひかり

岡崎これや我が光

おかざき わ きよつど

岡崎これや我が郷土

な てんけい
名にしゆたけき天恵の

やはぎ ながれ み

矢作の流まさに見よ

つち こ にしみかわ

土は肥えたり西三河

なが ひろ へいや

眺めは広しこの平野

ふる われらあき

奮えよ我等明らけく

えいせい わざよ し

営々の業世に布かん

おかざき わ ひかり

岡崎これや我が光

おかざき わ きよつど

岡崎これや我が郷土

煙にぎわう新興のけぶり しんこう

時代の勢じだい きおいにみ見よ

音おとにさんぎょうぎきょうゆるる産業の

誉ほまれはたか高さかえしのの栄

奮ふるえよ我等われらまゆ眉とわかくく

躍やくしん進としの都市いまどよむむ

岡崎おかざきこれや我が光ひかり

岡崎おかざきこれや我が郷土きょうど

※このテキストは資料『岡崎市歌』にルビを振り、読みやすいようにしました。

【コラム】

北原白秋は近代詩歌の開花を迎える明治末期から大正・昭和の三代にわたって、歌、短歌、童謡、民謡など詩歌のさまざまな分野に業績を残しました。

山田耕筰は「赤とんぼ」、「からたちの花」などの作曲を手がけました。

北原白秋が作曲し、山田耕筰が作曲した「ペチカ」や「待ちぼうけ」「この道」などは小学校の音楽の時間に聞いたことがあると思います。

岡崎市では市歌の作成を専門家へ依頼することを考え、当時詩人として活躍していた北原白秋に歌詞を、作曲家として活躍していた山田耕筰に作曲を依頼しました。昭和十二年（一九三七）四月二十九日に発表され、昭和三十七年（一九六二）四月に条例によって岡崎市歌となりました。

岡崎市では毎年一月一日に一般市民や諸団体に呼びかけ、一堂に会して「新年交礼会」が行われていますが、昭和三十六年（一九六一）からは式次第に岡崎市歌が加えられています。

また、平成十二年(二〇〇一)には、岡崎市制八十周年記念として『岡崎市歌』のCDが制作されるなど、現在まで広く愛されています。

(参考・『岡崎市制80周年記念 ふるさとの歌 ―「岡崎五万石」から「青い地球はだれのもの」まで―』 あいち印刷 他)

星の銀貨

グリム兄弟

楠山正雄 訳

むかし、むかし、小さい女の子がありました。この子には、おとうさんもおかあさんもありませんでした。たいへんびんぼうでしたから、しまいには、もう住むにもへやはないし、もうねるにも寝床がないようになって、とうとうおしまいには、からだにつけたもののほかは、手にもったパンひとかけきりで、それもなさけぶかい人がめぐんでくれたものでした。

でも、この子は、心のすなおな、信心のあつい子でありました。それでも、こんなにして世の中からまるで見すてられてしまったので、この子は、やさしい神さまのお力にだけがって、ひとりぼっち、野原の上をあるいて行きました。すると、そこへ、びんぼうらしい男が出て来て、

「ねえ、なにかたべるものをおくれ。おなかがすいてたまらないよ。」と、いいました。

女の子は、もっていたパンひとかけの「らず、その男にやってしまいました。そして、

「どっぞ神さまのおめぐみのありますよっつ。」と、「どのついで、またあるきだしました。すると、こんどは、どどもがひとり泣き

ながらやって来て、

「あたい、あたまがさむくて、「おりそうなの。なにかかぶるもの
ちようだい。」と、いいました。

そこで、女の子は、かぶっていたずきんをぬいで、子どもにやり
ました。

それから、女の子がまたすこし行くと、こんど出て来たこども
は、着物一枚着ずにふるえていました。そこで、じぶんの上着をぬ
いで着せてやりました。それからまたすこし行くと、こんど出
て来たこどもは、スカートがほしいというので、女の子はそれもぬ
いで、やりました。

そのうち、女の子はある森にたどり着きました。もうくらくな
っていましたが、また、もうひとりこどもが出て来て、肌着をねだ
りました。あくまで心のすなおな女の子は、(もうまっくらにな
っているからだれにもみられやしないでしょう。いいわ、肌着もぬ
いであげることにしましょう。)と、おもって、とうとう肌着まで
ぬいで、やってしまいました。

さて、それまでしてやって、それこそ、ないといいつて、きれいさつ
ぱりなくなってしまったとき、たちまち、たかい空の上から、お星
さまがばらばらおちて来ました。しかも、それがまったくの、ち
かちかと白銀色をした、ターレル銀貨でありました。そのうえ、

ついででしたが、肌着をぬいでやってしまったばかりなのに、女の子は、いつのまにか新しい肌着をきていて、しかもそれは、「この上なくしなやかな麻の肌着でありました。」

女の子は、銀貨をひろいあつめて、それで「ししょうゆたかにくらしました。」

※このテキストは青空文庫から抜粋し、ルビを振り、読みやすいようにしました。

【コラム】

グリム兄弟は非常に仲の良い兄弟であったと言われています。一方、非常に対照的な面もあり、兄ヤーコプ（1785-1863）は、小柄でありながらも強靱で健康な体の持ち主、弟ヴィルヘルム（1786-1859）は背は高いものの、常に病気に苦しめられていたそうです。

今から200年ほど前の1812年、ドイツにてグリム兄弟が編集・刊行した「子供と家庭の童話集」が、いわゆる「グリム童話」です。子どもに読み聞かせたり、絵本で最初に出会う物語として、グリム童話は永遠のベストセラーともいわれています。近年では、子どものための読み物にとどまらず、文芸学、民俗学、フェミニズム等、様々な分野で研究対象となっています。

（参考・『決定版グリム童話事典』三弥井書店 他）

人生劇場

じんせいげきじょう

尾崎士郎

おざきしろう

花道

はなみち

しがつしじゆん は よる
四月初旬の、ある晴れた夜である。

おかざきえき

はなみ

きやく いっ

じよそう

岡崎駅のプラットフォームは花見がえりの客で一ぱいだ。女装

おとこ

おも

だんそう

おんな

あか てぬぐい

くび

した男がいるかと思うと男装した女がいる。―赤い手拭を首に

いくくみ

だんじよ

だれ

かた

かた

まいた幾組かの男女が、誰ということもなしに肩と肩をもつれあ

わせて、もうへとへとにつかれきっているのに、まだありったけの声

むり

ふんいき

ちようし

あ

をふりしぼって、無理にピントのはずれた雰囲気に調子を合わせ

ようとしているのだ。(中略)

だいてら

なか

じゆつぎゆつぎ

わかもの

あおなりひやうきち

しうぜん

かた

この雑踏の中に、十九歳の若者、青成瓢吉が傲然と肩をそびや

みぎはし

た

のぼ れっしや

く

かしながら、右端のプラットフォームに立って上り列車の来るのを

ま

待っていた。

ひやうきち

かれ

ひやうたろう

にじゆうねんかん

あめ

かぜ

ああ瓢吉よ！彼はおやじの瓢太郎が二十年間、雨にうたれ風

ま

あかちや

は お

にさらされて着ふるしたところの赤茶けたトンビを羽織り、とこ

は

おお

かなぐ

ふくろ

も

ろ剥げのしたニッケルの大きい金具のついた袋のようなカバンを持

ひやうたろう

あいよう

さんじゆうねん

およ

ち、瓢太郎が愛用することすでに三十余年に及んだという、あの

めいじしやねん

じやうりゆうしんし

じゆうじ

かぢや

かじう

明治初年に上流紳士のあいだに流行した兜のような恰好の

シャツホをかぶり、蝙蝠傘を杖にして立っているのである。(中略)

しうもりがさ

つえ

た

シャツホをかぶり、蝙蝠傘を杖にして立っているのである。(中略)

駅夫が大声で叫びながら群衆の整理をはじめた。汽車がちかづいてきたらしい。そのとき、彼の肩をぐっと押すようにしてたたいたものがある。

「おい、ずいぶんさがしたぜ」

「やあ——」

瓢吉がどきつとしてふりかえると、紺紺の筒袖を着て、卒業したあとでもまだ昔のとおりの中学生の正帽をかぶっている二木が緊張した顔をして立っていた。

アーク燈の光の中で二人の青年の眼が感激にふるえている。瓢吉の服装は当時(大正初年)においてさえも、なお且異様に厲すべきものであったが、しかし、あきらかにおやじのお古を何の悪びれるところもなく堂々と着用しているというかんじが、二木の心に好ましい友情をそそりたてた。

「よく来てくれたね」

「うん、今朝、君の手紙を見たんだよ。苦学をするんだって——？」

僕はあれをよむとすぐ君に会いたくなってるね、昼頃から来て今まで岡崎で遊んでいたんだ、それで、君、——学校はきまったのかい？」

「何もかも行ってからのことだ」

——憂うるなかれ友よ、という感激をこめて、瓢吉は二木の顔を見た。遠くから彼の乗るべき汽車の灯が見え、轢音が夜空に高まってき

た。

※このテキストは「尾崎士郎全集 第一巻(講談社)」から抜粋し、ルビを振り、読みやすいようにしました。

【コラム】

尾崎士郎は、明治三十一年（一八九八）、愛知県幡豆郡に生まれました。明治四十三年（一九一〇）には、愛知県立第二中学校（現愛知県立岡崎高等学校）に入学し、岡崎市ともゆかりのある方です。

政治家をこころざして早稲田大学に進学し、在学中に社会主義運動にかかわり中退しますが、やがては離脱して文学の道に転向します。その後は花形作家として活躍して、昭和三十九年（一九六四）に亡くなりました。

『人生劇場』は二十年近い年月をかけて完成した長編小説で、昭和八年（一九三三）から都新聞に「青春篇」の連載を開始し、その後、シリーズが断続的に新聞等に連載されました。

「青春篇」は刊行後、作家の川端康成から絶賛されてベストセラーとなり、映画化もされました。この作品以降、尾崎は流行作家として活躍することとなります。

三州横須賀村の辰巳屋さんしゅうのひとり息子たつみやである青成瓢吉あおなりひょうきちが「男らしく生きよ」と育てられ、早稲田大学に入学し、学園騒動を引き起こすまでを描いたのが「青春篇」で、大正時代を背景とした青春小説です。

今回の「花道」は、「青春篇」の一部であり、主人公の瓢吉ひょうきちが東京へと旅立つ場面になります。

（参考・『愛知の文学』 浜島書店 他）

風 かぜ

たけひさゆめじ
竹久夢二

風が、山の方から吹いて来ました。学校の先生がお通りになると、街で遊んでいた生徒達が、みんなお辞儀をするように、風が通ると、林に立っている若い梢も、野の草も、みんなお辞儀をするのでした。

風は、街の方へも吹いて来ました。それはたいそう面白そうでした。教会の十字架を吹いたり、煙突の口で鳴ったり、街の角を廻るとき蜻蛉返りをしたりする様子は、とても面白そうで、恰度子供達が「鬼ごっこするもん寄っといで」「と云うように」「ダンスをするもん寄っといで」といいながら、風の遊仲間を集めるのでした。風が面白そうな歌をうたいながら、ダンスをして躍廻るので、干物台のエプロンや、子供の着物もダンスをはじめます。すると木の葉も、枝の端で踊りだす。街に落ちていた煙草の吸殻も、紙屑も空に舞上って踊るのでした。

その時、街を歩いていた幸太郎という子供の帽子が浮かれだして、いつの間にか、幸太郎の頭から飛下りて、ダンスをしながら街を駆けだしました。その帽子には、長いリボンがついていたから、遠くから見るとまるで鳥のように飛ぶのでした。幸太郎は、驚いて、

「止め！」と号令をかけたが、帽子は聞えないふりをして、風とぶざけながら、どんどん大通りの方までとんでゆきます。

一生懸命に、幸太郎は追っかけたから、やっとの「と」で追いついて、帽子のリボンを押えようとすると、またどつと風が吹いてきたので、こんどはまるで輪のようにくるくると廻りながら駆けだしました。

「坊ちゃん、なかなかつかまりませんよ。」

帽子が駆けながらいつのです。

すると、こんどは大通から横町の方へ風が吹きまわしたので、幸太郎の帽子も、風と一しょに、横町へ曲ってしまいました。そしてそこにあつたビール樽のかげへかくれました。

幸太郎は大急ぎで、横町の角まできたが、帽子は見つかりません。

「ぼくの帽子がないや」

幸太郎は、もう泣きだしそうになって言いました。帽子をつれて

いった風も、幸太郎を気の毒になつてきて、

「坊ちゃん、私が見つけてあげましよう。」

そういつて、ビール樽のかげの帽子のしっぽを、ひらひらと吹いて見せました。幸太郎は、すぐ帽子のある所を見つけました。

「万歳！」

幸太郎は、帽子の尻尾をつかんで叫びました。

「風かぜやい、もう取とられないぞー！」

幸太郎こうたろうは、帽子ぼうしのつばを両手りょうてで、しっかり握にぎっていました。

「ほう、ほうかぜ、風かぜはそう言いいながら、飛とんで行いきました。」

エプロンこも、木の葉はも、紙屑かみくずもまたダンスをしていたけれど、

幸太郎こうたろうの帽子ぼうしはもうダンスをしませんでした。

※このテキストは青空文庫から抜粋し、ルビを振り、読みやすいようにしました。

【コラム】 竹久夢二

竹久夢二は明治十七年（一八八四）岡山県で生まれました。本名を茂次郎といい、幼いころから絵に関心を持っていました。

明治三十八年（一九〇五）二十二歳の時に投稿したコマ絵（挿絵の一種）が博文館「中学世界」夏期増刊号で入選し、この時はじめて「夢二」の名が用いられました。

この頃夢二は早稲田実業専攻科の学生でしたが、色々なところに投稿したものが入選を果たし、画家としての足場を固め、同校は同じころ退学をしました。

一般に繊細な美人画家として知られている夢二に多くの影響を与えたのがたまき、彦乃、お葉の三人の女性と言われていますが、夢二は幼少年向きの子ども絵も多く手がけました。表紙や口絵はもとより、自作の小説に挿絵を入れるなど、絵と詩文の結びつきによる児童文学の世界に関心を抱いていました。

この「風」が収められている「童話 春」と、姉妹編とも呼べる「童謡 凧」の二冊は夢二の後半生を代表する児童書とされています。

「童話 春」のはしがきに「…その頃まだ私の手許から小学校へ通っていた子供をめぐりに書いたのが巻頭の数篇です…」とあるようにこれらの作品は夢二の手で養育されていた幼い息子たちに向けられて語られています。今回の「風」も夢二の描く絵のようなやさしさや叙情が感じられる作品です。

人生の後半、夢二は三年近く外遊し、昭和八年（一九三三）台湾台北市で展覧会を開くも得るものがなかったばかりかすべての作品が行方不明となってしまいました。その時すでに重い病におかされており、翌九年（一九三四）四九歳でこの世を去りました。



◎大正十五年に発刊された「童謡 春」は

昭和四十九年、ほるぷ出版から

「名著復刻 日本児童文学館 第二集」

として当時の装丁のまま復刻されています。

当館にも所蔵していますので、ぜひ夢二の物語とたおやかな装丁、挿絵を読んでみてください。

【参考】 『別冊太陽 竹久夢二の世界』平凡社

『竹久夢二』石川桂子・谷口朋子著 六耀社

『名著復刻 日本児童文学館 第二集』ほるぷ出版

おにぎりの味

あじ

なかやうきちろう
中谷宇吉郎

お握りには、いろいろな思い出がある。

北陸の片田舎で育った私たちは、中学へ行くまで、洋服を着た小学生というものは、誰も見たことがなかった。紺紵の筒っぽに、

ちびた下駄。雨の降る日は、藁草でつくったみのぼっしをかぶって、

学校へ通う。外套やレインコートはもちろんのこと、傘をもつことすら、小学生には非常な贅沢と考えられていた。

そついう土地であるから、お握りは、日常生活に、かなり直結したものであった。遠足や運動会の時はもちろんのこと、お弁当にも、

ときどきお握りをもたされた。梅干のはいった大きいお握りで、

とろろ昆布でくるむか、紫蘇の粉をふりかけるかしてあった。

浅草海苔をまくというような贅沢なことは、滅多にしなかった。

しかしそついうお握りの思い出は、あまり残っていない。それよりも、今でも鮮かに印象に残っているのは、「飯を焚いた時のおにぎのお握りである。

十数人の大家族だったので、女中が朝暗いうちから起きて、煤けたかまどに大きい釜をかけて、粗朶を焚きつける。薄暗い土間に、青味をおびた煙が立ちこめ、かまどの口から、赤い焰が蛇の舌の

ように、ちらちらと出る。

私と弟とは、時々早く起きて、「のかまどの部屋へ行く」とがあった。おこげのお握りがもらえるからである。「飯がたき上がると、女中が釜をもち上げ、板敷の広い台所へもってくる。釜の外側には、煤が一面についているので、それに点いた火が、細長い光の点線になって、チカチカと光る。まだ覚め切らぬねほけまなこの目には、それが夢のつづきのように見えた。

やがてその火も消え、女中が蓋をとると、真白い湯気がもうもうと立ち上がる。たき立ての「飯の匂いが、ほのほのとおなかの底まで浸み込むような気がした。女中は大きいしゃもじで山盛りにご飯をすくい上げて、おひつに移す。最後の「おこげのところだけは、上手に釜底にくっついたまま残されている。その薄狐色のおこげの皮に、塩をばらっとぶって、しゃもじでぐいと「そげると、いかにもおいしそうな、おこげがとれてくる。女中は、それを無雑作にちよつと握って、小さいお握りにして、「さあ」といって渡してくれた。

香ばしいおこげに、よく効いた塩味。「のあついお握りを吹きながら食べると、たき立ての「飯の匂いが、むせるように鼻をつく。これが今でも頭の片隅に残っている、五十年前のお握りの思い出である。

その後大人になって、いろいろおいしいものも食べてみたが、幼い

頃ころのこのおにぎげのお握にぎりのような、温あたたかく健すこやかな味あじのものには、
 二度にどと出で会あったことことがないないような気きがする。

都会とかいで育そだったうちの子供こどもたちは、恐おそらく「ううう味あじを知らしず
 過すしてきたにちがいない。「ペン教おしえてやりありたいよきうな気きもする
 が、それはほとんふかのうど不ちか可能ちかに近いことことであるう。おにぎげのお握にぎりの
 味あじは、学がっこう校がよ通あまがないに雨傘あまがなをもつといいうよぜいたくうな贅ぜいたく沢どを、一ど度おぼえた
 子供こどもには、リアライズしゆるいされあじない種おも類おもの味あじと思おもわれるからである。

※このテキストは青空文庫から抜粋し、ルビを振り、読みやすいようにしました。

【コラム】

「雪は天から送られた手紙である。」こんなロマンチックな言葉を残した中谷宇
 吉郎なかやうは、明治三三年（一九〇〇）石川えぬま県江沼郡片山津町かたやまつ（現・加賀市）に生まれま
 した。雪の結晶の美しさに感動し、世界で初めて人工的に雪の結晶を作り出すこ
 とに成功した国際的な物理学者で、名随筆家でもありました。

著者の没後、新聞や雑誌のコラム欄に発表されたままになっていた数多くの随
 筆は本に収められました。「おにぎりの味」は発表場所、発表年月は不明ですが、
 著者の幼時のことを語ったのものです。

病のため、昭和三七年（一九六二）六十一歳でこの世を去りました。

出身地である石川県加賀市には「[中谷宇吉郎雪の科学館](#)」が設立されており、
 雪の結晶を模もした外観を持つ六角形の建物となっています。

（参考『中谷宇吉郎随筆選集 第三巻』朝日新聞社他）